たまきゅう便り

発行
多摩丘陵病院
広報委員会
町田市下小山田町
1491

病院移転を前にし思うこと

多摩丘陵病院　理事長　掛川　暉夫

令和3年4月からの新年度を迎えるに当たり、この機会を利用し皆様方に一言述べさせて戴きます。併し先日職員一同に対し私の思いを込めた拙文を配布したばかりです故、内容重複する点多々あるが御容赦願いたい。先ず、コロナ騒動、医療崩壊などの国難に対応し、其の一翼を担い重責を果たしつつ、ケアミックス病院としての本領を発揮し、地域住民の福祉、健康管理に日夜精進され成果を上げられて居られる職員一同に対し、心から厚く感謝御礼申し上げます。さて、ご承知の事と思いますが、現在本院がメインプロジェクトとしている新病院新築移転計画のファーストステージと考える「地鎮祭」が事務系職員の血の滲む努力に依り資金計画、土地問題等を見事にクリヤーし、無事古式豊かに厳粛裡に執り行われ、基盤となる「鍬入れ式」も力強く終了致しました。

残念ながら今回はコロナの影響で参加者に制限が在ったが、院内はもとより院外からの参加者方々の新病院への期待の大きさを強く肌身に感じ、身の絞まる思いが全身に漲り地域住民の期待に答えなければと責任の重大さを感じ、覚悟を新たにした次第です。

新病院は令和4年11月落成、5年2月開院予定とされて居るので新病院への移転、運営及び跡地で独立する回復期リハ病院の改築、利用等の具体案の検討が緊急の課題となりセカンドステージに入った訳で、今後は主に医療系の人々の出番となり、果たす役割は多岐にわたり多摩丘陵病院の将来を決める重大案件施行となります。特に新病院には地域に適した救急救命センターの拡張、強化、脳血管センター設置を目玉の一つとして組み入れ高齢者の多い此の地域のニーズに答えると同時に地域に密着したケアミックス病院とし急性期、回復期患者等が効率よく診療受けられる様にと、これ等相互間の緊密利用を図る、即ち従来の縦割り独善傾向にあった組織形態を横軸の風通しも良くし、縦組織間の連携を密に図り病院全体のグローバル化、一体化により患者の利便性向上ばかりでなく病院全体のセクショナリズム解消の絶好のチャンスと捕らえその実現に邁進しなければならない。現病院の適所に新病院の完成予想図が掲示されて居りますが、其れを見て、地域住民の福祉、健康管理を担う医療の殿堂とし誇れる建物が創設されると確信出来ますが、此れから施行されるソフト面、即ち診療部門でも一体化した合理的組織形態を組み入れた企画のもと其の実現を重ねて強く要求致します。「旧来の陋習を破り万機公論に徹すべし」の精神で特に今後新病院を含む組織全体を背負ってゆく現役諸兄、君らでなくては出せないＡＩ利用等を駆使した忌憚なき意見具申を網羅し、新しい組織に適した利便性に富んだ思考を導入21世紀に相応しい病院を実現すべく積極的参加を切望して止みません。

1. 感染対策の基本的考え方

感染は1つの要因だけでは成立しません。要因がそろうとヒトーヒト感染がおこり、感染に弱い方々を苦しめることになります。病原体が何であっても基本的には同じです。ただ、病原体の大きさや特徴により、「うつりやすさ」には違いがあります。

高齢者、体力・免疫力がない方、手術や病後の体力低下、抗がん剤治療中など、感染に係りやすい状態の身体のことです。

多くは、口腔、鼻腔、目の粘膜。飛沫を浴びないようマスク・フェイスシールドなどを使いましょう。傷口や治療上の管なども菌やウイルスの入口になります。健康管理にこころがけましょう。

病原性はなかなか左右できません。

細菌やウイルスの量は身体に入る前にできるだけ少なくしておく必要があります。換気もその一つ。また、細菌がバイオフイルムを作ってしまうと除去しにくくなります。身体の清潔を保つこと、汚染をためない清掃が大切です。

感染の伝播経路にはさまざまなものがあり、ここをブロックすることでヒトヒト感染を防ぎます。
結核、麻疹（はしか）は空気感染、インフルエンザは飛沫感染と接触感染、ノロウイルスは接触感染と塵埃感染（嘔吐物が乾いて漂ったウイルスを吸い込む）、新型コロナウイルスは飛沫感染と接触感染とエアロゾル感染。
菌やウイルスの持ち運びを防ぐために普段からできることとしては、3密の場所へは行かず、マスクをして、人の手が多く触れる場所に触れたら手をきれいにすることと、会食は同居者程度に限ることです。

2. 多摩丘陵病院での感染伝播経路対策の例

【正面玄関】来院者全員に、体温測定と手指消毒をしていただいています。

【発熱者診療】一般診療、一般救急診療とは別の入口からご案内しています。

【撮影】有症状者の撮影時に新型コロナ用の個人防護用具を着用します。

【日常】口腔ケア・吸引など患者様がマスクがない時にはフェイスシールド。

【外来待合】3連の椅子は真ん中を使用しないよう協力をいただいています。

【発熱者診療】車で来院された方にはそのままお話を伺うこともあります。

【人間ドック】各検査は個別に案内して待合は間隔をあけています。

【病棟】新型コロナ陽性者の受け入れは、他の入院患者と区分けをして対応。

このように感染対策を工夫しておりますので安心してご来院ください。発熱・風邪症状の方は事前にお電話をお願いいたします。ご入院の患者様にはPCR検査をうけていただき、ご家族の方にはZOOMを使用した面会をご案内しております。（2021年3月25日　文責：感染管理認定看護師　辻奈津美）

多摩丘陵病院新築移転事業

令和3年2月5日　地鎮祭を行いました。

医療法人幸隆会　多摩丘陵病院は、令和3年2月5日に新病院新築移転に向けて地鎮祭を開催いたしました。

緊急事態宣言下でもあり、新型コロナウィルス感染拡大の対策を施しつつ、規模を縮小しての開催となりました。

施主の幸隆会、設計会社のネクサス株式会社、施工会社の大成建設株式会社の関係者と、学校法人国士舘の大澤理事長や建設用地地権者ほかご来賓の方々が、工事期間の安全と無事を祈願いたしました。

新病院のオープンは令和5年春の予定です。

祭壇です

マスクとアクリルボードで
感染対策もしっかり

【　鍬入れの儀　】
施主を代表して掛川理事長が
力強く鋤入れを行いました

最後に施主を代表して
掛川理事長がご挨拶

第22号　たまきゅう便り　令和3年4月

多摩丘陵病院新築移転事業

各位

多摩丘陵病院は、東京都町田市下小山田町で、「生きる力を支え合い、ぬくもりのある医療と看護を提供する。」を理念として、昭和57年5月より地域に密着した医療機能を提供してまいりました。

しかしながら、病院の大部分が開設より約39年経過しており老朽化が顕著であるため、当院の医療機能を継続していくことが困難であること、また当院の医療機能をより一層充実したものにする必要があることを踏まえ、当院より徒歩3分の町田市下小山田町字東谷1329他に新たに病院を建設し、医療機能を分割移転したいと考えています。

具体的には、回復期リハビリテーション病棟117床が現在の病院に残り、一般病棟146床及び地域包括ケア病棟53床を新しい病院に移転いたします。

移転時期は令和5年春を予定しております。工事期間中は近隣の皆様にはご迷惑をおかけしますが何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

医療法人社団幸隆会
多摩丘陵病院
理事長　掛川　暉夫
院長　　島津　元秀

【現在の多摩丘陵病院】

回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟	117床
一般病棟	146床
地域包括病棟	53床
合計	316床

【多摩丘陵ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病院(仮称)】

回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟	117床

【(新)多摩丘陵病院】

一般病棟	148床
地域包括病棟	51床
合計	199床